

麻布大学ティーチング・ポートフォリオ

所属 臨床検査技術学科

職階 准教授

氏名 高梨正勝

麻布大学では、教育研究活動その他大学の諸活動を恒常的に自己点検・評価し、その結果を検証して改善に結び付けることにより、教育の質保証を行う観点から、各教員が『ティーチング・ポートフォリオ』を作成しています。ティーチング・ポートフォリオの構成及び更新サイクルは以下のとおりです。

1. 教育の責任・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年
2. 教育の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年
3. 教育の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年
4. 教育の方法の改善・向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組・・ 毎年
6. 学生の学修成果向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
7. 指導力向上のための取組・・・・・・・・・・ 3 年
8. 今後の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年

1. 教育の責任

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

基礎専門科目について病理学の基礎から現在注目されている疾患までの幅広い知識や情報を理解する能力を持つ学生を育てることを目標とし、病因を中心とした疾患の発症機構を知ること、必要な検査や治療法を理解することを目指す。

基礎科学は専門科目を履修する上での土台となるために完全な理解を目指す。卒業研究や病理学特論では病因学を中心とした興味のある疾患に関する内容を探求する能力をもたせることと、研究を通じて専門性を高めるような知識を習得することを目的とする。

科目名	学科・専攻	単位種別	配当年次	受講者数(単位:人)
病理学I	臨床検査技術学科	必修	2	約120
病理学II	臨床検査技術学科	必修	2	約120
基礎科学演習実習（分担）	臨床検査技術学科	必修	1	約120
病理検査学実習	臨床検査技術学科	必修	3	約120
病理学実習	臨床検査技術学科	必修	2	約120
組織学・同演習	臨床検査技術学科	必修	1	約80
総合臨床検査学（分担）	臨床検査技術学科	必修	4	約80
卒論指導	臨床検査技術学科	選択	2～4	26

2. 教育の理念

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

臨床検査は幅広い知識と正確な検査結果が求められる。現在の臨床検査分野では検査の自動化や将来AIの導入が想定される中で、時代に対応可能な技術や知識を身につけることが必要と考えている。これには基礎的・基本的な知識・技能の習得、知識・技能を活用することが可能な能力の習得にある。病理学の基となる正常と疾患との差が検査や治療法の指標となるため病気について詳しい知識の習得が必須であると考えている。

3. 教育の方法

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

時代に即した情報や知識を提供するために、専門紙などから最新の情報を講義で紹介し、詳しく説明するようにしている。特に病理学においては分子生物学的な手法を応用した分子病理学的な診断が導入され始め、原理や状況についての紹介を行っている。卒業後の進路で、この分野に関連する検査を担当する場合の土台となることを目的に取り組んでいる。また、それぞれの疾患の発症に関する原理を説明し、その疾患に必要な検査や治療法、その後の経過に必要な検査について紹介し、各臓器の代表的な疾患について知識を習得可能なように講義を行っている。

(1) アクティブ・ラーニングについての取組

有

講義で紹介した内容や項目について、講義ごとに、または数回の講義毎に関連する課題を提示し、その場で回答してもらう。講義の内容の復習とその項目中で重要な箇所を確認する意図を含めた問題を出題している。

(2) ICTの教育活用

有

学理を活用し、講義資料を事前に提示する。この資料は病理学の教科書として利用可能ように工夫をしている。

4. 教育の方法の改善・向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

(1) 教育（授業及び実習等）の創意工夫

B

講義単元を含む疾患に関する最新の情報を提示し、さらに、その疾患に関する検査、治療や研究などの情報を提示し、それぞれの病気に興味をもたせるように講義を行った。中間試験や期末試験の直前の講義では内容の理解を深めるために試験範囲の総復習を行った。

(2) 学生の理解度の把握

B

講義の終盤に行う小試験や中間試験及び、定期試験の結果と講義で受ける質問の内容から内容の理解度を判断している。

(3) 学生の自学自習を促す工夫

B

講義で使用する資料（スライド）に図や症例の写真を多く取り入れ、印象深いものを心がけている。文字での説明より図での説明を多く取り入れている。

(4) 学生とのコミュニケーション

A

講義終了後や講義時間外及びメールなどで学生からの質問に対応をしている。

（５）双方向授業への工夫

A

質問に対する解答を俊敏に行い、メールや学理などを介して返答する場合もある。

（６）国家試験対策の取組（獣医学科・臨床検査技術学科）

A

4年生に対しては過去10年間の病理学の国家試験の出題率の解析を行い、出題傾向と病理学の領域で学習する重要性を確認させた。

1～2年生に対しては過去の国家試験を講義中に回答させ、現時点の知識で回答ができることを体験させることで低学年に対して国家試験が身近にあることを随時認識させてきた。

5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

（１）授業評価アンケート結果の授業への反映

講義資料の学理による事前の提示により予習や復習が可能ないようにした。スライドでの補足説明が必要な場合は単元のまとめの講義を期間の中間や終了に行い、おさらいをおこなった。

（２）（１）の結果による改善・向上の具体的な成果又は課題

病理学は臨床検査技師向けに適した教材がないため、講義で使用する資料が細かすぎる点もあったものの資料は好評だった。成績評価も含めて、小テストなどの単元ごとの試験は評価が良かったが、個々の学生間での成績に差が生じた。

（３）（２）を踏まえた次年度の取組

現行の資料の内容で最重要部分さらにダイジェストしたものを加える。
小テストの回数を増やし理解度を確認する。

6. 学生の学修成果向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

（１）現在までの学生の成績向上に資する取組及びその成果並びに今後予定している取組

臨床検査技術学科での到達の目安の一つが国家試験の合格であり、在学中に初年度から国家試験を認識させる機会の必要性を感じる。特に病理学は1年で履修する組織学を含め、2年で履修が終了してしまう。講義のプログラムの編成の必要性も感じるが、学生自身でも受験意識を高めるために、1年終了時に組織学、2年生終了時で病理学の国家試験に出題された問題を回答できることを意識させ、各学年で履修の終了した科目に対する国家試験問題を体験させることが必要かと思う。

また、科目内で單元ごとの学生個々の理解度を解析する必要性を感じた。理解不足のまま進級すると最終学年でつまづくことが予想される。個人に対応した補講などの再教育を行う必要がある。さらに、基礎学力不足の学生が多いことが感じられ、徹底的な基礎科目の補講が必要かと思う。特に生物学や化学等の基礎科学での高校生レベルの学力不足が目にとまるため、1年生において学力別もしくは能力別に分けた教育が必要に思える。

（２）（１）の取組を通じて改善・向上が図られた学生の学修成果並びに当該取組に対して得られた学生及び第三者からの評価又はフィードバック

病理学で腫瘍に興味を持った学生が、授業とは別に腫瘍の専門書を勧めたところ独自に読むようになった。同様に研究室での学生には基礎知識をつけるために輪読を行い、腫瘍に興味を抱くようになった。

7. 指導力向上のための取組（FD研修参加等）

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

関連する分野に関しては積極的に参加を心掛けている

8. 今後の目標

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

基本的な部分の理解度を高めるため、個別の理解度の解析と指導を行い国家試験合格へ導く。入学生を含めた個人の基礎教科の理解度の解析と個別の対応による知識の習得。

先端科学への理解と興味を抱くような情報の提供と、研究指導を考えている。